

Ⅲ 研究会紹介

不老会基礎文献研究会

名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程

安田 裕昭

昨年度の不老会は「方法論研究会」と銘打って、「リサーチデザイン」に目的を特化して、読書会と研究報告という形態で開催してきた。本年度も引き続き、経験的研究に焦点を当てた「方法論研究会」を継続とするとともに、一昨年まで行われていた社会理論に関する読書会も再開することになった。方法論研究会の具体的な活動については、前号の「研究会報告」を参照してもらうこととし、ここでは基礎文献研究会について、その発足の経緯と目的、活動内容に触れていきたい。

不老会は一昨年まで、社会理論に焦点を当てた読書会を中心に活動してきた。2006年度は、稲葉振一郎『「資本」論を読む』、ルーマン『信頼』、アガンベン『ホモサケル』等を取り上げ、2007年度は、メアリー・ダグラス『リスクと文化』、石戸教嗣『リスクとしての教育』、その他に社会運動に関する論文などを取り上げた。それぞれ「生権力とシステム」「リスク論と社会運動」といった具体的なテーマに沿って、研究会を行ってきた。

本年度は、具体的なテーマのもとで文献を講読していくという形態ではなく、「準古典」と呼ぶに値する文献を中心に取り上げていく。具体的には、戦後から80年代前半までに原著が出版されたものを取り上げていく（初回の研究会では、マートン『社会理論と社会構造』を取り上げた）。

社会科学において古典を読む意味は、「事実資料を知るのが眼目ではない……古典から学び取るのは著者の研究姿勢とか、対象を認識する段取りとか、体系性に関して」（須藤 2003: 序文）である。マルクスであれば「近代における階級構造」、ヴェーバーであれば「資本主義の倫理」の必然性を踏まえた説明を熟読玩味しなければならないだろう。

本研究会が準古典を取り上げる理由のひとつは、先に挙げた「研究対象を扱う形式」を学び取るということである。ふたつめは、文献で議論された分析枠組や概念が、現在の研究のなかに「どのように適用可能なのか」を議論することである。この2つの目的を達成するために、内容的に古い古典ではなく、現在の社会を分析するツールとして、準古典の方がより多くの実りを得られると考えたのである。

具体的な活動については、初回の研究会の模様を紹介することで代えたい。初回の研究会では、マートン『社会理論と社会構造』を取り上げ、「機能主義の範例」「顕在的機能・潜在的機能」「社会理論と経験的調査」「機能主義と準拠集団論」などについて議論した。特に機能概念による分析の困難（一定の項目が特定の結果を及ぼす範囲の単位を特定することの難しさ）について、活発な議論が展開された。

今後の活動は、トゥレーヌ『脱工業化社会』『声とまなざし』、フーコー『講義集成：安全・領土・人口』『講義集成：生政治の誕生』、ブルデュー『再生産』『ディスタクシオン』

など講読予定である。その他にアーレントやアドルノ、アルチュセールの著作も候補に挙がっている。また、参加者に積極的に個人研究報告もしてもらい、読書会での成果をそれぞれの研究に反映できればと考えている。

参考文献

須藤泰秀, 2003年, 『エンゲルス「サル」のヒト化における労働の関与』を讀む』鶏鳴出版.

社会政治研究会

名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程

中根 多恵

2009年5月7日に、名古屋大学で第1回社会政治研究会 (Social Politics Forum) が開催された。大岡頼光 (中京大学)、上村泰裕 (名古屋大学)、田村哲樹 (名古屋大学)、山岸敬和 (南山大学) ら、若手の社会学者や政治学者を中心に、今回はじめて開かれた研究会である。

遠方の大学も含めた11大学、さらにはNPO団体からの参加もあり、出席者の所属は非常に多様であった。また、専門分野別にみると、社会学系18名、政治学系16名、その他3名の計37名であった。「社会政治研究会」という名のとおり、社会学的次元からのベクトルと政治学的次元からのベクトルが向き合った、その中間点での学問的考察の共有を目指したともいえる今回の研究会は、有意義かつ斬新なものとなった。

第一報告は、名古屋大学法学部の田村哲樹先生による《ベーシック・インカム、自律、政治的実行可能性》である。「ベーシック・インカム (以下BI) はいかなる「自由」を保障するのか」という問題提起に始まり、パレイスの「真の自由論」より、BIが保障すべき自由は「自律としての自由」としたうえで、一方、「その自由/自律は、個人主義的にのみ達成可能なのか」という点の見直しから、「民主主義のためのBI」という田村先生ならではの視点が導入された。さらにBIの実行可能性について、「政治」の観点から検討するという「政治的実行可能性」についての試論が提示された。

報告後の議論では、「具体的な政策を行う主体は誰なのか」「現行制度と併行するかたちでのみ導入可能なのではないか」「BI導入に要する年数ほどのくらいか」など、BI導入の具体的な政策論議をはじめ、フリードマンの負の所得税との関連性、BI制度と共産主義の相違点、またBI導入によるソーシャルワークの意義の消失についてなど、多様な論点が提起された。

しかし、最も印象深かったのは、「民主主義」の理解に関する議論である。『熟議の理由—民主主義の政治理論』(勁草書房、2008年)等の著者である田村先生ご自身の考察を拝聴できたことは、筆者のみならず参加者全員にとって貴重な経験だったに違いない。民主主義のためにBIを導入することへの疑問に対して、田村先生は「民主主義は問題解決の一つの手段」と述べ、あくまで「共通理解づくりのための民主主義」を強調された。

続く第二報告、中京大学現代社会学部の大岡頼光先生による《死生観と老人介護——ス